

# 衛星 タイタン の ある朝

蔵原大&齋藤路恵

「イナゴが湧き起り、人民はたいそう飢餓に苦しんだ。……この年、穀物は一石五十余万銭に高騰し、人間同士が食いあうほどだった。そこで軍吏や兵士の新たな募集をとりやめた。」

『三國志』【魏書武帝紀第一】

\*\*\*

未来は明るい。

テクノロジーは人類の未来を輝かせる。

それが嘘っぱち、と証明したのは人類自身。

いや、確かにテクノロジーは私たちの未来を輝かせた。人類は内戦に突入し、人工知能に操られた超兵器の閃光は八〇億人を殺戮。

生き残った五億人は太陽系の各地に安住を求めて散らばった。

かつて「地球」と呼ばれた惑星が赤茶けた荒野と化して、もう十年。今は「トランスヒューマン」世紀の……いや、そうじゃない。今は光明に照らされるのでもなく、絶望に閉ざされてもいない蝕の時「エクリプス・フェイズ」(Eclipse Phase)だ。

\*\*\*

[[ マスター、お知らせします、今は〇七〇〇時です ]]

吸ーッ、噴ーッ……

[[ マスター、お知らせします、今は〇七〇〇時一〇秒です ]]

吸ーッ、噴ーッ……

[[ マスター、お知らせし ]]

[[ プロフェッサー・サイモン、時報機能停止! ]]

今朝の鍛錬はこんなところかな。

フーッと息をつき、上段に蹴り上げた左足をゆっくり元に戻す。深呼吸を一回、二回。目を閉じて、胸に手を当てる。心臓の鼓動、生の瞬間を肌で感じ取る。太極拳は好き。苦い記憶、将来への不安、そんなことを心の隅に追いやってただ一打に集中できる。シンプルで明解。太陽系の政治とは大違い。

汗を流すためにシャワーを浴びると、水滴がポワポワと宙に漂った。あたしも軽さがましくなって、少し跳び上がった。一メートル上の天井にタッチする。タイタンの重力は(昔の地球人が決めた単位で)0.14G。地球に行ったらあたしの体は七倍重くなるのか。といってもあの星の重力圏に入ったことはまだないけど。

あたしの名前はシャロン=孫。人間(型)の女。公式年齢は二十五歳(地球時間で)。身長は一五七センチ(ヒューマン女性としてはかなり低い)。初対面の人には時おり中高生に、それも男性に

間違えられます。それほどボーイッシュな外見じゃないと思うんだけどなあ。胸とお尻は小さいですが、なかなかいい御容姿ですよ?

生まれは……あー(出生記録上でなら)タイタン(皆さん、知ってました?土星を廻る星ですよ)。今いるのもそこです。職業は人道支援ビジネス。実はこの度「SSS」(Safety and Security are yourS/安心と安全は貴方のもの)という会社を立ち上げて、災害のあった地域の支援とか法律の保護を受けられない人への援助を手がけております。我が社はあたしの家族、あたしの誇りです。それから仕事の傍ら、政治学と心理学を専攻しています。去年タイタン自治大学で博士論文が二本とも通りました(えへん)。今年は助成金貰ってフィールドワークを続けたいな。

それからもう一人(じゃないか。一人格だね)をご紹介したいと思います。我が友プロフェッサー・サイモン、といっても大学教授ではありません。この子はですね、あたしの支援人工知性こと通称「ミューズ」(MUSE)の一人です。この五年の仲で、困った時の相談役というか、うーんそう、脳内参謀長ドノってとこかな。普通のミューズよりもちょっと引っ込み思案ですけど、会計や戦術は凄腕なんですよ、彼女。おかげでずいぶん楽させてもらっています。いつもありがと、サイモン。[[ どういたしまして、マスター ]]

でも、そんなあたしはウソの塊です(!!)。姓名・年齢・出身は全部作りごと。ホントのあたしはようやく一〇歳のクローンです。躁鬱、PTSDそれにセックス依存症に悩んでる人殺しで超能力者で、エリートとして高速保育された「ロスト・ジェネレーション」の生き残り。発育中に誘拐され、工作人員の訓練を受けて洗脳され、惑星連合のスパイとなってタイタンの民主主義社会に潜入しました。それなのに、色々あって今ではタイタン政府直属の特別捜査官なのです。元々のあたし(って何?)からどんどん遠ざかっていく気がするなあ。それが成長っていう現象なのかもしれないけど。

元々のあたし違って何だろう、と歴史家としては時々考え込んでしまう。現代の産業は自我(アイデンティティ)の概念を猛攻中だ。人間の身体はクローン体や機械に取替え可能となって久しく(だから身体取引ビジネスは大繁盛だ)、人格データ、昔の言い回しだと「魂」だって、すっかり低価格になったバックアップ・サービスを利用して保存するのが当たり前になった。病気や不慮の事故だって、身体も精神もバックアップに差し替えれば万事OK。もちろんお金次第だけど。でも肉体を棄て、脳内の人格データを移送して「メッシュ」(Mesh)の大海を漂う情報体(インフォモーフ)になれば、衣食住の経費をゼロにできる。二世紀前にメッシュの遠祖「インターネット」が開発された頃、当時の貧しい人達もその中に逃げ込もうとしたのかしら。

不老不死という言葉がこんなに安っぽくなるなんて、千年前の中世地球で田畑を耕し、文字を読むことも書くこともなかった御先祖達には想像もつかなかっただろうな。往時の平均寿命はたかだか三〇歳代。それに対して、核融合宇宙船とハイパー情報ネットが行き交う時代の人類「トランスヒューマン」は、遺伝子操作と電子機器とで身体の

寿命を三〇〇地球年にだって延ばせるはず。でも、あたし達は本当に心から望んで長生きするの？ それとも社会が長寿を奨励するから追従してるだけ？

人と同じように生き、人の言う通りに生きるのを疑いさえしない人の「自我」って何だろう。今の太陽系の人口は五億人だそうさ。でもあたしを含めて、どれだけの人が「生きている」のかな。あたし達「ヒューマン」の未来はどこに向かっているのだろうか。

さて、お仕事だ。悪人に休息はない。タオルを使いながら、アメリカン・トラッドを着ようと思ったけど、まだいいか。通信インプラントに今日の衣装データを設定する（素っ裸の自己イメージを送信するのはちょっとまずいじゃない）。セッするのはブルックスブラザーズのスーツ、それにタイタン保安局大尉の記章。それから少し湿り気の残った身体をロングチェアに預け、目を閉じ、普通の民間人が所持するはずのない高性能機器にリンクする。思考の一つ一つが脳内のインプラント（体内蔵機器）を媒介して電波に変換され、発声と聴音という原始の通信手段では為しえなかった高速・大量のデータ送受が可能となる。下町のアパートの一室が、いや人間の大脳自体がたちまち仕事場へと早変わりするのだ。

[[ サイモン、レーザー通信機を経由してゴールドチャンネルαとの回線を開いて。認識コード、σ+ 11290…… ]]

[[ 回線開きました、マスター。受信者は送信者の認識コードを承認しています ]]

### \*\*\*

目を開けると、そこは古風な東洋の家具に囲まれた広々としている一室（そうか、ピビアン・タムのワンプの番番だったかも。失敗だ）。あたしの立っている向かい側の壁は全面ガラス張りで、燦燦と明るい日差しが降り注いでいる。太陽から遙か彼方のタイタンではありえない贅沢だ。そしてそのガラス壁の前には大柄な人のシルエット、いや、大柄な「猿人」がこちらに背を向けて立っている。両手を後ろで組み、肩をいからせながら。

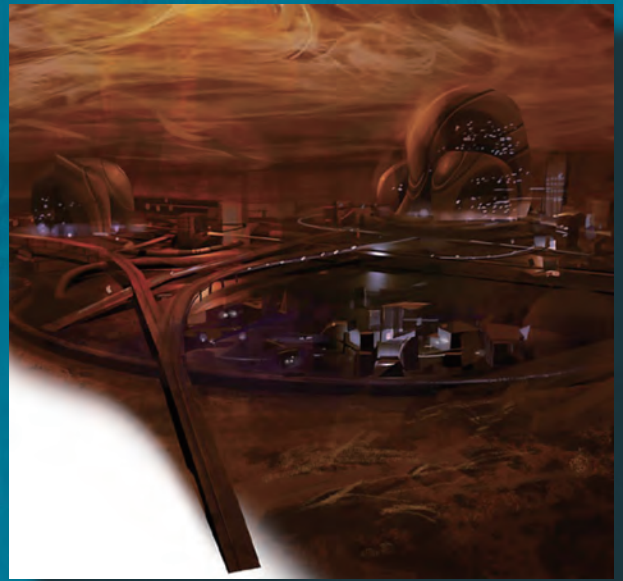
「シャロン=孫、任務報告のため出頭いたしました、局長」  
千年前からの慣習に則り、あたしは背筋を伸ばして直立不動、靴のかかとをカチリと合わせ、右手を挙げて敬礼のポーズをとる。

すると背広をまとったその猿人、おっと、政治的に正しい言葉は「知性化」オランウータンだね、はゆっくりと振り返り、報告書は読ませてもらった、と低い声でつぶやく。ざらつく赤い目でこちらを見定め……

「ようやく逃げ戻ってきたか、大尉。この腰抜けめ」  
「いいえ、局長。『壮士たる者、死地に赴くこと家路につくが如し』であります。どこに本官が腰を抜かす理由などありません」

飛び切りの笑顔を作った美少女、険しい顔のオランウータン、二人はそのまま数分間睨み合いつづける。けれどついに向こうがにやりとして、こっちも自然に笑い出してしまった。まあまあ座りや、嬢ちゃん、茶あでも飲まんかあ、と勧められ、薄い布切れ（サブトンというの？）に腰掛ける。相手もどっしり胡坐をかき、デンマーク語から北京中国語（やっぱ汉语は好いねえ）に切り替えて話し始める。そしてインチキ広東風なまりをがなりながら、毛むくじゃらが腕を軽く振るうと、テーブルの上に黒々かつ湾曲したセラミック製コップ二つ（Likyu……陸羽流……だっけ？）が出現する。部屋に満ちていくすがすがしい緑茶の香り。本物にこだわる人もいるが、VR（仮想現実）と現実の優劣を論じる意義はもはやないと思う。違いを見出せない二つの物をどう切り分けるというんだろう？

## タイタン



土星の衛星タイタンは地球の半分にも満たない大きさで、メタンの大気に包まれてオレンジに輝く。太陽から遙かに遠く、地表はマイナス100℃以下の極寒。この星こそ、多数のドーム状都市が繁栄する技術社会主義国家「タイタン連邦」の本拠地だ。



「ともあれ火星ではようやく。報告書読んだわ。上手く書いたのう」

「あ、簡潔にまとめた程度ですが」

「簡潔明瞭、詳細は巧みに省略、読んだ内容をすぐ忘れるくらい無味乾燥やな」

「ご不満でしたらイーリアス並みの叙事詩に編集いたしますが」

「いやいや、機密任務の報告書つちゅうのは空気みたいなので正解や。下手打つと報告書でうて亡国書になるからの。大事なことほどさりげのう言う、これがプロの認知操作術や。お前さん、いよいよ諜報のコツを掴んできたなあ。次も頼むで」

「恐れ入ります」

なんでも人類最古の職業は娼婦とスパイなんだそうさ。人類が宇宙に進出しても賑わっているこの二つの職種について、あたしはこれでけっこうな経験を積んだと思う。心底うんざりしていた前職から抜け出し、タイタンのエージェントになって五地球年目、なにしろ諜報部門を二〇年近く仕切ってきたベテランに褒められるのだから、悪い気はしない。



「さて火星での兵器発掘の件やが、その前の武器取引阻止の件も殊勲甲やったな。犯罪組織にナノ兵器が渡らんでよかったわ。ところで共闘したダイレクト・アクションの傭兵はお前さんの素性、ホンマに最後まで気付かなかったんかいなあ」

「孫博士はただの『通りすがり』の『人道支援活動家』なんですよ?」

「悪女シャロンや。で連中の回収した反物質爆弾は本物やったんやな」

「本物ですね。起動に必要な部品が数点だけ『欠けている』のを除けば」

「その部品ちゅうのは……先方で用立てるのは難しいんとちゃうかな」

「はい、何しろ精密機器ですから」

「ほんならワイらの方で『在庫あったら』送った方がええちゃうかの」

「そうですね。先方は局長の御配慮に感謝したいと思います」

期せずして二人とも微笑がこぼれる。困っている友達を助けるのは良いことだ。

ダイレクト・アクションは、いわゆる民間軍事会社だ。だから、あたし達のタイタンが属する「自治主義者同盟」を目の敵にしている連中、例えば惑星連合とか木星共和国といった勢力、昔風に言えば帝国主義の魔窟にも潜入できるというわけ。タイタンは、ハイパーコープが主体とならずに植民が行われた珍しい大規模コロニー。だからハイパーコープであるダイレクト・アクションと共闘するのは大変だった。

でも、あたしにかかれれば……

「ほんなら火星の一件はこれで着着やな。ご苦労やった、大尉。ああ、ただなあ。戻って早々でえろうすまんが、実はお前さん頼みの難しい仕事ができてるう」

「お気になさらず。どういった?」

「ちよっくら太陽系外縁のコロニーまで行って欲しいんや。カイパーベルトの端っこんなやが、概略はな、まあダウンロードしてザツと見とくれや」

たった2ギガバイトしかない任務概要書を閲覧するのは造作もない。古代人は粘土板とか植物繊維の紙といった固形記憶媒体でデータを送受したという。現代では脳に埋め込まれた通信機と記憶インプラントとでギガ単位のファイルなど瞬時に処理してしまう。便利だっけ? 五体満足に生まれる人が眼や耳の利便性を意識することはめったにない。それから任務の詳細を二〇分かけて確認しあった後……

「新任務、了解です。ただ今よりSSS本社に戻りまして出撃準備を行います。他の案件はございますか」

「いんや、話はそんだけや。そや、戻ったらクラブに繰り出さんか。一緒にな。ピフテキ食わせたる。こんくらい分厚いな。市販のキノコ代用品やら複製物でうで、なんと酪農の牛肉やで」

「ありがとうございます。しかしながら本官は肉食主義ですので……」

「そうやったな。なら大盛りの菜っ葉サラダを付けるかい」

「トマトソースのかかった豆腐ハンバーグが適切かと。特に天然素材のものが……」

「天然モノかい。えらい厳しいこと言うのう。う〜よっしゃ。奢ったるで」

「よろしければ私の部下達にも美味なる温食の機会を……」

「人形みたいなツラして、しょうもない甘ったれたタカリ屋嬢ちゃんやなあ。まあええ、仰山連れてきな。派手にサラダパーティでもやるかい」

「ありがとうございます」

「話は以上やで。解散」

「孫大尉、退出します」

こうだからこの猿人は好いのだ(まあオヤジなんだけど)。道理に則って素早く判断できる上司というのは本当に得がたい。そこはまるでエルヴィン＝ロンメルみたいだ。

「おっとそや、お前さん。まだ彼氏の人格データバックアップ、探しとるんか」

「はい?」

「お前さんの男友達や。ほれ、ワイらが会おうきっかけになった例の事件の被害者」

「……はい、時々ですけど」

「そろそろ地球暦で五年か」

「あの人には返しきれないほどの借りがあります。五十年でも返しきれないほどの」

忘れようとしても忘れられない記憶。父の言いつけに従ってタイタン自治大学に入ったあたしは、二十歳足らずの「孫」という学生と出会った。特にハンサムでもなかったのに、あの人は理想を信じて輝いていた。太陽系を駆け巡る国際救助隊みたいのがあれば人類は平和に一歩近づける、ですって? あまりにも馬鹿馬鹿しいおとぎ話なのに、でも何故か惹かれてしまった。それまでの下劣な連中とは違う爽やかさを感じたのだ。そうしてあたしの初恋が始まった。もともと父親、いや本当は上司兼監視役のヤツは気に入らなかったみたい。たぶんあのゲス、小娘の肉体をお楽しみ続けたかったんでしょね(ゴキブリ野郎め!)。それでも孫君のおかげで、あたしは封印されていた記憶を取り戻し、偽の父親と対決する決意を持つことができた。それが大きな、あんなに大きな代償を伴うことになるとは知らずに……

「もうええんと違うか。随分苦しんだやろ。彼氏生きとったら、えろう心配するで」

「孫子曰く『卒を視ること愛子の如し。故に之と共に死すべし』ってご存知ですか」

「出たなあ、十八番の『孫武兵法』やろ」

「あの人は……、あの人はあたしを好きだと言ってくれたんです。それで十分です。あの人に会わなかったら、きっとあたしは偽の記憶を植えつけられたまま、今でも下っ端のセックス奴隷で破壊作業員だったでしょう。……ち、ちよっと笑えますよね」

「ちいとも可笑しくないで。嬢ちゃんは純情なんやなあ」

「未熟ってことですよ、それ。でもいつか死ぬなら、納得いく戦いをしたいんです」

「また公共バックアップ・サービス、断ったそやないか。滅るもんじゃないやろに」

「……人生の一瞬一瞬の輝きを薄めたくないんです。『ひとたび生を得て、滅せぬ者の在るべきか』……死が怖いから逃げる、それって卑怯な振る舞いなんじゃないんでしょか?」

「まあええがな。民主主義国家のスパイ組織には、お前さんみたいのが在ってもええ。そりや今みたいな、善も悪もよう分からん宇宙ちゅうは、真っすぐな心根の持ち主には生き辛い。けどな、頑張るちゅうのは楽しく生きるためにするんや。苦しかったら、周りを見て楽しいことに寄り添えや。彼氏はほんもな、お前さんの陰しい顔より笑顔を見たいに決まっとる。そや思わんか?」

「……は、はい、それは……」

あたしは局長に大恩がある。だから「人の食に食せし者は人の事に死す」のだ。偽父とその仲間が孫君を撃ち殺した直後、あたしは連中を殲滅した。でも所詮は手遅れ。だからあの人の亡骸を抱いて自決を図った。せ

音声による通信? そんな古臭い手法は信頼できない。メッシュ通信網を経由したデジタル信号による意思疎通はきわめて簡便かつ正確。

めて希望のカケラを手にして全てを終わらせようと思ったのだ。でもタイタン保安局の部隊が乗り込んできて……新しい物事が始まった。

そこから数々の戦いを生き残り、幾多の試練を克服して、タイタン政府の秘密出資による「人道支援のための」企業「SSS」(安心と安全は貴方のもの)が生まれた。自治主義派同盟の特別機動部隊として秘密任務を遂行しながら、同時に災害支援や人権保護活動に尽力するという、ヤヌスの顔を備えた民間軍事会社 (PMSC)。こうして、昔たった一人の学生が夢見た理想はついに実現への一歩を踏み出した。いや、そうじゃない。賢者イシイネオ曰く「開かれた道を歩むのは自分である。歩くのは自分の足以外にはない」のだ。

「厳しいこと言うけどな、オドレはもうタイタン保安局の幹部で、大勢の部下持ちや。戦いではの、部下は上司の顔色に一喜一憂する。命かかるとるからな。部下の前では負けてもニコリ余裕の笑顔やど。泣いたらあかんで」

「前に、前にも言われましたね。『生きるのを怠けんな』って引つ叩かれて、痛かった」

「オドレが『殺してください』なんて言うからや。それにジャジャ馬娘の石頭を叩いて、痛かったのはワイの手のひらやで、アホ。まだ死神に魅入られとるんかいな」

「いいえ……あ、あたし、本官は戦士として義務を全うしたいんです。死神から逃げずに」

「このアホウが。ええか、花も実もある若いのが、あわてて死ぬ必要はないんや。戦士はいつも御身御大切。バンザイ攻撃はご法度や。これは命令である。厳重に申し渡しておくぞ」

「あの、でも……はい、了解しました」

「まあええ、わかればええ。そんでな、昔の話を蒸し返ししたんは、実はな」

オランウータンは虚空を掴む格好をして、大きな右手を開いた。そこには青い結晶が一つ輝いている。むしろバーチャル空間に結晶などありはしない。高圧縮データファイルだ。

「これな、天王星 (ウラヌス) で一ヶ月前に起こったデータ窃盗事件の極秘ニュースや。どうやら犯人は太陽系各地の人格バックアップ・アーカイブズを過去六年に渡って無断ハッキングしとってな。主犯は射殺されたんやが、どうも政治的に有力な共犯者がいるようや。それで事件は都合良く隠蔽されて、共犯のヤツは捕まっとらんらしい。外務省にネゴって関連資料を貰ったんやけど、何かの参考になるかいな」

差し出された結晶をゆっくりと、心なしか震える手でつまみ上げる。ファイルに触れた途端、それはあたしの脳にダウンロードされ……

「とても。局長、とても参考になります」

「それだけや。引き止めて悪かったのう」

「それでは本官はこれで失礼いたします」

「待てや。また忘れとるぞう、ニコリ」

「はいっ、局長」

「おう、それや、ベッピンや。ほんならまたな」

「はいっ、では帰国後に」

再び目を閉じる。数秒してゆっくり目を開けると、そこは再びアパートの自室。窓からは淡いオレンジの太陽光が、都市のドーム外壁を抜けて差し込み、脇に設置しておいたメーザー通信機を照らしている。あたしは身を横たえていたロングチェアから起き上がると、背伸びしてから、メッシュ通常回線に接続して副官に呼び出しをかける。

### \*\*\*

[[ 早、阿列克斯。我是……]]

[[Excuse me, sir?]]

しまった、こいつに中国語はわからない。つい自動翻訳モードをオフにした。英会話、英会話と。ごめん、アル。

[[Good Morning, Alex. It's Sharon. Can you hear me?]]

[[こちらアルアミラル。打ち合わせはいかがでした、社長]]

[[朗報よ、ピクニックに行けるわ。実動部員に非常召集か

けてくれる? あたしの出社予定時刻は〇八〇〇時。着いたらすぐブルーフィングしましょう。準備お願ひできる? あと深宇宙作戦の用意も]]

[[ 承知。他には何か? ]]

[[ そうね、もう一つ。あなた、奇跡って信じる? ]]

[[ 宇宙はアッラーの奇跡の産物ですよ ]]

[[ アル、あなたっていつも面白いわね。大好き! ]]

[[ あの、社長? ]]

[[ 何でもない。後でね。シャロン終了 ]]

通信を終えてふと気付くと、頬に水滴が伝っていた。目にゴミが入っただけ……ってことにしよう。でも分かっている。どんなにテクノロジーが進歩したって、人が人を想う気持ちに替わる物など出来はしない。「ヒューマン」が「ヒューマン」である限り。

古人曰く「士は己を知る者のために死し、女は己を喜ぶ者のために装う」とか。「ヒューマン」とはつまり「士」であり、且つ「女」である人のことなのだと思う。あたしに奇跡が起こせるかどうか、納得のいく戦いをやり通せるかどうかなんて分からない。でも今度ははしくじらないぞ。今度こそは。そうして本物の服を着て、部屋を後にした。

[[ 完 ]]

老驥伏櫪

老いたる駿馬はうまやに伏しても

志在千里

思いは千里の彼方にある

烈士暮年

熱い魂の者は生の終りになっても

壮心不已

青春の心を忘れはしない

一步出夏門行 by 曹操孟徳

### 参考文献

- International Committee of the Red Cross, and Federal Department of Foreign Affairs, Swiss Government. 2009. *The Montreux Document on Private Military and Security Companies*. ( <http://www.icrc.org/eng/resources/documents/misc/montreux-document-170908.htm> )
- Lars Blumenstein, Rob Boyle, Brian Cross, Jack Graham, John Snead and etc., *EclipsePhase-2nd* (Posthuman Studios, LLC., 2009) ( <http://eclipsephase.com/releases> )
- Williamson Murray and Richard Hart Sinnreich(eds.), *The Past as Prologue: The importance of history to the military profession* (Cambridge University Press, 2006)
- デズモンド・ヤング、清水政二訳『ロンメル將軍』早川書房、1978年
- P・W・シンガー、山崎淳訳『戦争請負会社』日本放送出版協会、2004年
- P・W・シンガー、小林由香利訳『子ども兵の戦争』日本放送出版協会、2006年
- 浅野裕一訳『孫子』講談社、1997年
- 石井米雄『道は、ひらける—タイ研究の五〇年』めこん、2003年
- 金谷治訳『新訂孫子』岩波書店、2000年
- 小竹文夫・小竹武夫訳『世界文学大系5B 史記 列伝篇』筑摩書房、1962年
- 陳寿、裴松之注、今鷹真・井波律子訳『正史 三国志1』筑摩書房、1992年
- 中村うさぎ『私という病』新潮文庫、2006年
- 野田敬生『心理諜報戦』筑摩書房、2008年
- 松本良男・幾瀬勝彬『秘めたる空戦 三式戦「飛燕」の死闘』光人社、1996年



## 図像に関するクレジット

本書で利用しているイラストは以下の通り。『Eclipse Phase Core Rule』 及び『Sunward The Inner System: A Location Sourcebook for Eclipse Phase』は Post Human Studio LLC よりクリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示・非営利・継承」ライセンスのもと出版されている。

p2 キャラクター：小珠 泰之介

p2 囲み記事内：『Eclipse Phase Core Rule』 p107 より

p2 左柱部分：『Eclipse Phase Core Rule』 p250 より

p5 (この頁) 背景：Zachary Graves

ベースグラフィックデザイン：Adam Jury

レイアウト：八重樫 尚史

## 図像に関するクレジットの例外

以下の画像の使用に関してはクリエイティブ・コモンズ・ライセンスに則って管理されているものではありません。図像の無断複写・転載は禁止します。

各小説のタイトル図像：ストックフォトサービス『iStockphoto』の写真を使用し、その使用許諾のもと八重樫尚史が加工して作成したものです。もとの写真の著作権は原作者に、加工後の図像の著作権は八重樫尚史個人に帰属します。



クリエイティブ・コモンズ・ライセンス：  
「表示・非営利・継承」 3.0 Unported  
Eclipse Phase は、Posthuman  
Studios LLC の登録商標です。